

米国における“歴史家のように読む”教授方略の事例研究 —V. ジーグラの「レキシントンの戦い」の授業分析を手がかりに—

Teaching Strategies of “Reading Like A Historian” in the United States : A Case Study of Ms.Ziegler's History Class.

原 田 智 仁*
HARADA Tomohito

本研究の目的は、米国の歴史教育界で近年注目されている「歴史家のように読む (Reading Like A Historian)」教授方略の内、特に「精読 (Close Reading)」の具体的な指導方法を明らかにすることにある。そこで、2012年にサンフランシスコの高校で観察・録画したV. ジーグラの米国史授業「レキシントンの戦い」の事例を取り上げ、考察することにした。まず、ワインバーグらによる「歴史家のように読む」教授方略の意義とねらいを明らかにした上で、当該授業の分析対象となる事実として、授業中の教師と生徒の発言・応答 (録画より再現) と活用された教材を確定し、具体的な指導展開の順にそれぞれについて分析・考察を加えた。その結果、次の5点が明らかになった。①本方略の熱心な実践者には、「出所の裏付け」、「文脈への位置付け」、「実証」、「精読」は区別してとらえられている。②「精読」に先立って、「出所の裏付け」と「文脈への位置付け」が重視されている。③「精読」の後に「実証」を位置付けようとしているが、実際には「精読」の過程に「実証」は入り込む。④「精読」は歴史固有の解釈的・構築的性格を反映して、「出所の裏付け」、「歴史的な文脈への位置付け」、「実証」の方略と関連付けざるを得ない。⑤本方略に基づく授業には教師の熟達と指導力、精神的な強さが欠かせない。また、本教授方略を市民のツールとして、普通の高中生・中学生を対象に実践するためには、主題の設定や教材の選択、グループ構成や時間配分等、検討すべき課題があることを指摘した。

キーワード：歴史家のように読む、ワインバーグ、歴史教授方略、精読、事例研究

Key words : Reading like a historian, S.Wineburg, teaching strategies of history, close reading, case study

1 問題の所在

近年の米国の社会科教育界で注目される歴史教授方略の一つに、スタンフォード大学のワインバーグ (Sam Wineburg) の提唱する「歴史家のように読む (Reading Like A Historian)」 (以下 RLH と略称) がある。教科書に基づいて、細々とした人名や日付等の個別的知識を大量に教授する伝統的な歴史教育を批判し¹⁾、歴史家のように史料の読解を通して真実に迫る方法を採用すべきだとの主張である。だが、そもそも中学校や高校の学級に大学の歴史学科で学ぼうと考える生徒、将来歴史家になろうとする生徒がどれほどいるだろう。おそらく、その数は極めて少ないにちがいない。そんな中で、RLH に説得力はあるのだろうか。この問いに対するワインバーグの回答はきわめて明快である。「だからこそ必要なのだ」と。なぜなら、「人々が詳細の森で道に迷い欲求不満でお手上げの時に、歴史家はパターンを見出し、矛盾を理解し、合理的な解釈を提示する強力な読解方法を開発してきた。…我々がフォックス・ニュースや MSNBC のニュース²⁾ に接する時に常に感じる対立的意見の理解に、歴史家の方法は役に立つ。単純化すれば、RLH

により培われる技能は市民性のために不可欠なツールになる。³⁾」からだという。

では、歴史家の開発した、市民性のためのツールとなりうる読解とはどんな方略を指すのだろうか。ワインバーグの主宰するスタンフォード歴史教育グループ (Stanford History Education Group) (以下 SHEG と略称) のホームページでは、①出所を裏付ける (sourcing)、②文脈に位置付ける (contextualizing)、③実証する (corroborating)、④精読する (close reading) の四つが挙げられている⁴⁾。生徒は読解といえ、一次史料であれ何であれ、教科書のように最初から最後まで文の意味を理解しようとする。これは日本の場合も変わらない。他方、歴史家はまず史料の出所を確認し (方略①)、それが作成された時代の文脈に位置付けて読み解こうとする (方略②)。さらには、他の史料と比較・対照したりしながら、当該史料の信頼性を吟味する (方略③)。こうした歴史家固有の読解についても日米間に差はなく、大方が納得できよう。だが、問題は精読 (方略④) である。これは果たして歴史家固有の方略なのだろうか。精読 (クロス・リーディング) とは、もともとテキストの

*兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻小学校教員養成特別コース

平成25年10月31日受理

一部を入念に読解する文芸批評の概念であることからすると、歴史家固有の方略というよりむしろ①～③の方略を組み込んで史料を読解する一般の方略ととらえるべきではないか。また、かなりの集中力と熟練を要するはずの歴史家の精読が、普通の中学生や高校生に可能なのだろうか。いくつかの疑問が生ずるが、幸いにしてRLHに依拠する歴史授業を観察し、記録する機会を得た。したがって、本稿ではその授業事例を手がかりに、RLHの教授方略を「精読（クロス・リーディング）」に焦点化しつつ分析・考察してみたい。それを通して、筆者の疑問への解答を見出したい。

なお、RLHは2002年にワインバーグがワシントン大学からスタンフォード大学へ転任後に持ち上げたSHEGの研究成果であることから、日本における先行研究はほとんどなく、管見の限り論文化されたものは中村洋樹の研究ただ一例である⁵⁾。中村はRLHの思想的基盤としてシャナハン(Shanahan)らのディシプリナリ・リテラシー(disciplinary literacy)に着目するとともに、RLHの開発に至るまでのワインバーグの認知的研究に触れながら、市販の教材・シナリオ集⁶⁾に掲載された展開事例から二つを選んで学習の具体像を明らかにしようとした。しかし、中村は前記①の「出所を明らかにする方略」の適用例としてアメリカ革命の事例「レキシントングリーンにて何が起こったのか」を、また③の「実証する方略」の適用例として1920年代の事例「電気と女性の家事」を考察するに留まり、史料読解に不可欠なはずの「精読(クロス・リーディング)」の過程については触れていない。もちろん、それはシナリオ集の限界であって中村の責任ではないが、その点を究明しないとRLHの実践的特質と課題は見えてこないであろう。それゆえ、精読の実態(具体像)に迫ろうとするのが筆者の問題関心であり、本研究の意義もそこにあるといつてよい。

2 ジーグラー実践の概要

(1) 実践者と授業記録収集の背景

ジーグラー(Ms.Valerie Ziegler)は、カリフォルニア州サンフランシスコのサンセット地区にある公立総合高校エイブラハムリンカーン・ハイスクールで、米国史、経済学、AP米国政治を担当する社会科教師である。2010年にはカリフォルニア州教育省より、その年のTeacher of the Yearの一人に選ばれるとともに、権威あるギルダー・レアマン米国史研究所より、同年のカリフォルニア州History Teacher of the Yearにも選出された。彼女はSHEGのメンバーとして、RLHに基づく歴史授業を熱心に実践していたことが受賞の大きな理由になったものと推測される。

筆者は、ワインバーグの直接の推薦と仲介で彼女の歴史授業を観察し録画することができた。その意味でも、

RLHの主旨を最もよく理解している実践者の一人といつてよいだろう。授業観察は、2012年9月10日(月)の12時より行われた。対象は11学年(16～17才)の「米国史」の授業である。

(2) 授業の主題と教材

授業の主題は「レキシントンの戦い」である。これはアメリカ革命の発端となった1775年4月19日未明の戦いであり、前記の中村の研究で分析された事例の一つがこれに該当する。因みに、「レキシントングリーンにて何が起こったのか」は、RLHの手法でこの戦いにアプローチする主発問を指している。ところで、この問いの背景には米国における根強い建国神話がある。日本の高校世界史の教科書では、アメリカ独立戦争の発端となった事件としてその名称が記されるにすぎないが、米国では長い間、英国側の攻撃に対して植民地の民兵が勇敢に応戦した独立革命の物語として神話化しており、歴史の授業でもそれに疑問を持つことなく教えられがちだという。だが、少なくとも歴史家であれば神話化された通説を批判検証すべく、それぞれの立場から書かれた一次史料を吟味して、戦いの真相に迫るであろう。ワインバーグやジーグラーは、この方法をレキシントンの戦いの学習にも応用すべきだと考えるのである。

具体的には、後掲の授業記録に明らかのように、英国側の将校バーカーの日記(衝突の起きた1775年4月19日の日記)、植民地側の民兵N・マリケン、P・ラッセル他32人の証言の記述内容を批判的に分析し、事実は何であったのか(レキシントン広場で何が起こったのか?)に迫っていく。そして、二つの史料分析を踏まえて、最後にこの戦いについて衝突の起きた1775年に描かれた絵画と、100年ほど後の19世紀後期に描かれた絵画を比較し、民兵の描き方の違い—1775年のものでは逃げ惑い、19世紀後期のものでは堂々と立っている(教材・シナリオ集における当該章のタイトル“Standing tall” or Fleeing the Scene?はそれを如実に示している。)に着目させ、独立戦争150周年記念切手(1925年)の図柄には、1775年の絵ではなく19世紀後期の絵が採用された事実を通して、歴史の神話化がなされたことに気づかせている。因みに、主な史料(教材)は以下の二つで、原史料に若干の手を加えて読みやすくしたと注記されている。

◆資料A 「バーカーの日記」

19日の午前2時、我々は胸まで水に浸かりながら川を渡って行軍を始め、レキシントンという町にあと数マイルのところにとどり着いた。そこには我々の敵が何百人も集まっていた。5時になると我々はレキシントンに到達し、町の中心部に集まっている200～300人の人々を見た。我々は攻撃に備えながら彼らを攻撃することなしに行軍を続けた。しかし、我々が近づくと、

彼らは1～2発ほど銃を撃ち込んできた。その途端に、我々も命令なしに駆け出し、銃を撃った。我々は編制を立て直そうとしたが、我々はひどく興奮して命令を聞くことは難しかった。

(出典：1775年4月19日、イギリス軍中尉ジョン・バーカーの日記から)

◆資料B「民兵の供述書」

我々、ナサニエル＝マリケン、フィリップ＝ラッセル、(その他1775年4月19日にレキシントンにいた32人の男性の名前が続く)は次のように証言します。4月19日の朝1～2時に、英国の兵士達がボストンからコンコードに向けて行軍していると聞きました。我々は指揮官から帰るように言われたので、ドラムの音が聞こえたら町の中心の広場に集まることにして家に帰っていました。朝5時にドラムの音を聞いて戻ってみると、我々に向かって大きな部隊が行軍してくるのが見えました。その時点で、我々の仲間はレキシントンに向かっている者もいましたし、すでにレキシントンに着いている者もいました。我々が散り散りになりはじめると、我々の背中に向かって彼らは銃を放ちました。そして我々の多くは殺され、傷つきました。我々の知る限りでは、イギリス兵が我々を撃つ前に、イギリス兵に銃を撃った者は我々の中には決しておりませんでした。我々の仲間が誰もいなくなるまで、イギリス兵は銃を撃ち続けていました。

(出典：3人の判事の前で1775年4月25日に行われたN.マリケンら32人の民兵による宣誓供述から)

3 精読の指導と実態—教師と生徒の発言から—

精読の指導がどのようになされ、生徒が実際にどのように対応し活動したのか。以下、T(教師)とS(生徒)の発言内容から考察する。なお、聴き取れなかった箇所もあるし、ジョーク的発言など、紙幅の都合で内容を一部省略した箇所もあることを予め断っておきたい。

T1：今日はアメリカ革命に焦点を当てます。今日の歴史的疑問と解釈および作文のテーマは、「誰が最初に発砲したか?」です。大変興味深いことに、これは歴史学者が論争を繰り広げている問題で、彼らはアメリカ革命を始めたのは誰か議論しています。最初に発砲したのは誰か?そして実はたくさんの歴史学者が、発砲があった場所について議論しています。そこで自分のところが革命の始まりだと主張しがっている都市がたくさんあります。なぜなら大きなメリットがあるからです。そうでしょう?特に観光産業の人は、「アメリカの独立のための革命が始まったのは我々の町です」と言えるわけですから。

本主題では、精読と実証という2つの手法を使って一次史料を検討していきますが、今日は精読の練習と出所の裏付け作業を行います。

まず、学習課題とその歴史的、社会的意義に触れた後に、本時は主に精読(close reading)と出所の裏付け(sourcing)の方略を用いることを伝えている。なお、ジーグラ先生の話では、次時以降には実証(corroborating)の方略も用いる予定になっている。さて、本時はこの後、七年戦争や植民地への課税強化など、アメリカ革命の背景的知識について、東部の地図を参照しながら確認する展開になっているが、その部分は割愛する。

T2：最後にノートするのは今日扱う戦いです。…(省略)…この日付は、今日の一次資料の検討にはとても大切なので書いておいて下さい。歴史学者が合意できたことの1つは、この日にレキシントンとコンコードで何かが起きたということです。これを戦闘と呼ぶ人もいるし、戦争の始まりと呼ぶ人もいるし、小競り合いと呼ぶ人もいるし、撃ち合いがあったと言う人もいるので、私たちはこの点を議論しますが、歴史学者は全員それがこの日にここで起きたということに同意しています。

ここまでがレキシントンの戦いの背景情報を習得する導入の時間であり、この後いよいよ本題に入る。

T3：というわけで今日は精読に取り組みます。誰か1つ目の、私たちがいつも精読する質問を読んでもらえるかな?ありがとうカーラ。

S1：著者はどんな主張をしているか?

T4：よくできました。著者はどんな主張をしているか?ハンナ、次を読んでもらえる?

S2：著者はどんな根拠に基づいてその主張を裏づけているか?

T5：著者はどんな根拠に基づいているか?はい結構です。これがたくさん出てくる大事なものです。アンソニー、次を読んでもらえる?

S3：はい。この文書は私にどんなことを感じさせるものか?

T6：この文書によってどんなことを感じるか?ですから、私たちが読んだ文書についてそこまで考えて下さい。ローラ、次を読んで下さい。

S4：著者は自分が正しいと思わせるためにどんな言葉や表現を使っているか?

T7：どんな言葉や表現でしょうか。じゃあ今日はこれらの文書の一部を調べて、言葉や言葉の選択を探しましょう。じゃあアシュレー、最後の質問を読んでくれる?

S5：著者が除外したのはどんな情報か?

T8：はい、よろしい。著者が除外したのはどんな情報

か？ 結構です。えー、この前の精読作業で気づいたことがあります。裏付けを探していた人は数人で、みんながやっていたのは情報源にマーカーを塗ることだけでした。何が足りなかったのかな？ 私がみんなにやってほしいことは何でしょうか？

S6：コメントです（複数発言）。

T9：コメントです。日付がどうなっているか？ この人は誰か？ 彼らはなぜそれを書いているのか？ そこで、最初の文書でそれを練習したいと思います。それから精読を行います。ここに枠がいくつかありますね。文書の裏付け探しをするためにマーカーを塗って、枠に書き込んで下さい。それから精読です。オジャあマーカーを持って、この文書の裏付け探しをどんどん始めて下さい。枠が2つありますね。この文書から裏付けを探しながら、この枠に私が何を書いて欲しいと思っているか考えて下さい。

生徒に「精読」と題された青い小ポスターを出させ、そこに記された五つの問い（下線部）を順に確認する。これは精読のための具体的方略とあってよい。その後、前掲の資料Aのプリントを配布してグループ毎に「裏付け」作業を開始させる。教師は机間巡視しながら、生徒の質問に答えたりコメントしたりしている。

T10：そう、裏付け探しにくつついている二つの枠に書き込んで下さい。その枠に書いて欲しいと思っているのは何だと思えますか？ えーと、ここに枠があるのかわかるかしら（資料のタイトル・出典、日付等から線を引いて余白につくられた枠）。それからこっちにもう一つあります。この枠に書いて欲しいのは何だと思えますか？ さっき書いたノートを見るといいかもしれません。はい、何でしょう？

S7：ここに書くんですね？

T11：そう、ここに書きましょう。はい、いいですね。いいです。おや、今書いたことはなぜダメなのかな？ ああ、そうじゃなくて、読むんじゃなくて裏付け探しよ。そこまで。そこで止めて。裏付けを探すだけよ。裏付けの枠に書き込むだけです。まだ読んではいけません。読まないで。ここでは他に何をしてるの？ 枠が二つあるから、裏付け探しで書けることを二つ考えるのよ。

「裏付け (sourcing)」の作業は、上記のように精読作業に入る前に史料の日付や著者を確定するとともに、著者の意図等についてどう解釈するのか、信頼できるのかどうか判断してコメントすることを指している。しかし、

生徒にとって初めてではない「裏付け」に関して、何度も教師の注意を受ける者がいるということは、その方法や意義が必ずしも全ての生徒には理解されていないことを示していよう。とりあえず、ここで一度目のグループ別作業は終わる。

T12：はーい、ありがとう。歴史に詳しいジョン、これらの日付に関連して何を書きましたか？

S8：これが書かれたのは次の日です。

T13：これは次の日に書かれた。なぜそれが大切なのでしょう？ これは100年後なのか？ 50年後なのか？ 2カ月後なのか？ いえ、これは翌日に書かれました。歴史学者にとってなぜこれが重要なのでしょう？

S9：より正確です。

S10：記憶が新しい。

T14：そのできごとを覚えているから正確だという可能性がありますね。いいですか？ これは翌日ですね？ ジャあ記憶は確かでしょうね。さて、誰かが言ってたけど、この文書は何ですか？

S11：日記です。

T15：これは一次史料の文書です。それをこの枠に書くはずだったのよ。具体的に言うところの文書は何ですか？

S12：日記です（複数発言）。

T16：そう日記です。なぜこれに意味があるんでしょう？

S13：個人的な話だからです。

T17：個人的な話ですね。ジャあその辺をよく考えましょう。彼は戦いの後本当に帰ったのかしら？ その時は、拝啓日記さん、そう私見たのよみたいな感じになって。彼が日記を書く理由は何が考えられますか？

S14：お金？

S15：もしかしたら報告のため。報告するため。

T18：何が起きたか報告するため。そうね。何が起きたか報告するために、これを誰かに送る必要があったのかもしれない。他にはどんな理由があるかしら？

S16：記録のため。そうすれば後でこれを思い出せます。

T19：つまり振り返って、起きたことを確かめることができる…。

S17：どこかで話す機会がある。

T20：どこかで話す機会があるかもしれませんね。ジャあ、これらすべてがこれを書いた理由かもしれません。彼は部隊が必要だったのかもしれない。もしかしたら彼は、私たちが考えていること、つまり誰が戦争を始めたかを伝えるつもりかもしれません。それは相手側だったと証明したいのかもしれない。

れません。だから彼がなぜ書いたのか考えなければなりません。そして一番大事なことだけど、彼は誰でしょう？

S18：中尉です。

T21：どっちの軍？

S19：イギリス軍（複数発言）。

T22：なぜわかるの？

S20：彼の見た目です（複数発言）。

T23：彼はイギリス人ですよね。それで、私たちはイギリスが戦争を始めたのか、入植者が戦争を始めたのかについて話しています。彼は何と言うと思いますか？

S21：入植者です（複数発言）。

T24：じゃあ日記を読む前に、私たちの想定は、著者はイギリス人で、これを書いたのは翌日で、これを書いたのはイギリス人なので、恐らく入植者のせいにするつもりだろうということです。いいですね？

ここまでがジグラーの考える「裏付け」作業である。つまり史料の内容を精読する前に、歴史家が必ず行う史料の出所を裏付けさせようというわけである。その確認事項がT24の波線部になる。これを踏まえて精読作業に入っていく。

T25：誰かみたいにならぬ何行かマーカーで塗りつぶすだけじゃなく、私が…今どんな風にやったか皆さんわかりますか？ よろしい。ここにメモを取りました（電子ボード上の資料Aの文書の内、「胷まで水に浸かり、5マイルほど離れた」にマーカーで印を付け枠に何らかのメモ）。いいですか？皆さんにやって欲しいことがこれです。はい。文書のここに枠があるのがわかりますね？ 文書をていねいに読んで、メモを取るのにこの枠を使ってもらいたいと思います。そしてメモを取ったことを話し合います。じゃあ今から残りをみんなにやってもらいます。まず最初のここから始めましょう。

T26：えーと19日。これは何ですか？

S22：日付です（複数発言）。

T27：そう、日付ですね？ たぶん彼は日記を書き始めたので、ここに劇的な戦いを書きたかったのでしょう。それとももしかしたら彼は塞か何かの中にいて、「さあ2時だ」みたいな感じ。どう？ 劇的でしょう？ 「2時に私たちは胷まで水に浸かって、川の中を歩いて進軍を開始した」。ええと、精読の中で、文書が私にどんなことを感じさせるのかについて触れましたが、彼はどんなことを私たちに伝えてありますか？

S23：誇り。

T28：彼は誇りを感じている。他には？では、彼は何の中を進軍していますか？

S24：泥。ぬかるみ。

S25：水。

S26：すごく長い川？

T29：泥と水。それがここまで（胸のあたりを指す）。

そうですね？ だから私はこの状況について考えています。で彼は劣悪な状況を説明しようとしています。そしてそれは…、少し危険なようですね？ そして彼らは前へ進んでいく。たぶん彼だけじゃなく、複数の人数ですよ？ここには大勢の軍隊がいるのですから。

「レキシントンという町から約5マイル離れたところに数百人の人々が集まっていて、我々を非難しようとしていると聞いた」。いいですか？ ですから彼は…、何百人もの人がそこで彼らを待っていることを聞いたと言いました。この疑問を議論してみましょう。彼はどんな根拠をあげていますか？ 彼は何百と言っているだけです。それは500ですか、それとも300ですか？それをほんとに信じますか？そうでしょうか？でたらめかもしれません。実際にはわかりません。彼は何百と言っているだけですから。

「5時、我々は到着し、たくさんの人を見た」。さあ、彼ははっきりさせました。「200から300の間だと思う」。これらの文章の中で、彼が使ったどんな言葉が目につきますか？

S27：「思う」（という表現）

T30：「思う」ですね？ その表現を見て、どんなことを感じますか？

S28：確信がない。

T31：わかりません。どちらとも取れます。確信がないのかもしれない。わかりません。もし誰かが私に、昨日公園やそういった場所に人が何人いたか聞いたとします。私はちゃんと数が言えるかわかりません。でも彼は正確にはわからないということを認めているのです。そうでしょうか？ 彼は推測しているのです。

「彼らは200から300人で、町の真ん中の広場に整列していた」。ではここで止めます。机に向かって先を読んで、この文書の中で他にマーカーを塗るものを見つけて下さい。精読用の質問を使って、この文書をよく読んで下さい。自分の机で声に出してね。何に印をつけるか考えて。軍隊調の声で読んでもいいわ。

ここまでは精読の具体方略の内、特に「この文書は私に

どんなことを感じさせるものか？」と、「著者は自分が正しいと思わせるためにどんな言葉や表現を使っているか？」に着目させているとあってよいだろう。さらに、グループ毎に机に向かい精読作業を続けさせ、教師は机間巡視しながら指導を加えていく。

T32：そう、マーキングを続けてるのね…、とてもいいですよ。続けて読んで下さい。そう、自分たちの机の誰かに読んでもらうのもいいですね。イギリス風アクセントでもいいわよ。じゃあ、彼が攻撃に備えていると言っているのはどう思いますか？そう、彼らは多少の攻撃があると想定していたのね。

全体を捉えること、それが今日の課題です。日付があって、そして何が起き…、それからさらに何が起きたのか？（机間巡視中の聴き取れた発言）皆さん、終わりましたか？そっちは終わった？

S29：はいっ。

2度目のグループ別の議論と作業が終わり、その結果について何名かの生徒に前に出て発表させる。

T33：はい結構です。すばらしい歴史的議論が行われましたね。マーカーを塗ってコメントを付けたものを誰か発表してくれませんか？誰かこっちへ来て発表して下さい。まとまってなくてもいいですよ。何でもいいんですよ、それがおもしろいの。

S30：やります。

T34：はい。いいわ。じゃあ私の後に続けて重要な事実を書いて下さい。

S31：あの…、男たち（兵士）はとても興奮していて命令が聞こえないと言っています。それは実際に発砲するためのある意味口実のように聞こえます。なぜなら、命令が一切聞こえなかったと彼がみんなをかばっているからです。命令があったとしても、彼らがそれを無視したとかそういうことではないでしょうか。

T35：じゃあその部分に基づいてこの文書を信用しますか？

S32：しません（複数発言）。

T36：つまり、ここには書くことが2つあるというわけね？彼女はほんとにいいことを指摘しましたね？これを信用しますか？そうするとそれは口実にはなりません。

エレナ、あなたも今とてもいいことを言いましたね。みんなに発表してもらえ？

S33：はい、わかりました。

T37：それに、この文書に関連してあなたのグループで

話し合ったことを説明してください。残りにマーカーを塗るなら塗って下さい。じゃあ、大きな声でね。

S34：えーと、彼らは攻撃に備えていたけど攻撃するつもりはなかったと書いてあります。だから最初イギリス軍は入植者が攻撃してくるのを待っていましたが、攻撃し返すつもりはありませんでした。でもその数行後で、1～2発銃が発砲されるのを聞いて仲間が命令を聞かずに発砲し始めたと言っていて、ちょっと矛盾があるみたい。つまり、攻撃するつもりはないと言いながら攻撃しに行くような感じです。

T38：いいですね。つまりここがポイントで、彼らは戦うために来たような感じがしますか？

S35：はい（複数発言）。

T39：そう、私はそれを言いたかったんです。攻撃するつもりでやってきましたよね？で、戦ったのかな？

S36：はい（複数発言）。

T40：そうですね。じゃあハンナ、あなたが指摘したことが1つあったわね。最後はどうなったかな？そう、発砲があったことはわかりました。この文書によると誰が最初に発砲したのかな？

S37：入植者です。

T41：入植者が最初に発砲した。それはどこに書いてありますか？誰かが発砲した。つまり、この授業の歴史的な問いは誰が最初に発砲したかです。この文書によると誰が最初に発砲しましたか？

S38：入植者が発砲しました（複数発言）。

T42：入植者が発砲した。ハンナ、あなたは何て言った？さっきそのことを話し合っていましたね。えーと、彼らは発砲し始めて、それからどうなったの？

S39：彼らは逃げます。

T43：彼らは逃げる。これがこの話のほんとに大事な部分です。逃げたのは入植者ですか？実は話し合ってきたことに関する画像を後でいくつか見せたいと思っています。いいですか？でもこの資料からは、入植者が最初に発砲して、イギリス軍が撃ち返して、それから入植者が逃げたということが言えますね。じゃあ、レキシントンの戦いで何が起きたか説明するにはこれで十分ですか？

S40：いいえ（複数発言）。

T44：もちろんそうですね。何が必要ですか？

S41：別の資料です（複数発言）。

T45：別の資料。誰の資料が欲しいですか？

S42：入植者のです。

T46：まあみんななんて頭がいいの。そうです。皆さんにもうひとつの資料を上げます。（資料Bを配布）では、入植者が何て言っているか見てみましょう。

これを読む前に、ティノ、入植者の考えについて話しましょう。彼らは戦争を始めたのは誰だと思っていますか？

S43：イギリス軍です（複数発言）。

T47：ティノ、誰だと思う？

S44：この人たち…、イギリス軍です。

T48：イギリス軍。なぜそう思うのですか？なぜなら、それが彼らの考え方だからですね？じゃあ、そういう意味で彼らはイギリス人を責めますね。それで彼らはイギリス人が戦争を始めたと言うでしょう。じゃあもう一度、この文書から裏付けを探して下さい。

ここでは、精読の具体方略の内、特に「著者はどんな主張をしているか？」と、「著者はどんな根拠に基づいて主張を裏づけているか？」に着目させて読解させている。そして、最後に異なる立場の資料として、植民地側からの資料の必要性に気付かせるに至った。そこで、今度は資料Bに対して「裏付け」と「精読」をすることになる。まず、グループ毎に裏付け作業に着手させ、教師は巡回しつつ個別指導を行っていく。

T49：えー、マーカーを塗るだけじゃなくて裏付けを探してくださいね。

そうです。彼らは軍隊で入植者です。今すぐ覚えてね。記憶力がいいわね。ですからここで言いたいのは、これは入植者の軍隊だということですが、この情報源では何が異なっているかしら？

S45：彼らは約34人です。

T50：彼らは34人。他には？それと具体的にどんな言葉を使っているかしら？それでどんなことが想像できるかしら？もし何かにかけて誓わなければいけない場合、あなたならどうする？そう、入植者の軍隊と一緒にならね。えー、民兵（minute man）という言葉が出てきたら、それは入植者の軍隊です。彼らはすぐに（in a minute）用意できる人たちだったからこう呼ばれました。いい？彼らは農民や労働者でした。

T51：さて、情報探して何がわかった？

S46：つまらない（It is boring）。

T52：それはなぜ重要な？彼らは困っているはずだから、何て言うと思う？可能性としては？そう？彼らは対処すると言ったかもしれないけど、実は私たちはこの文書について知っています。私たちはこれがベンジャミン・フランクリンのところに行くことも知ってます。でしょう？だからこれを聴く人たち（傍聴者）も全く異なってきます。それにそれがイギリスに行って裁判をして、イギリ

ス軍に落ち度があるということを証明するとしたら、彼らは本当のことを言わないかもしれないということも考えられます。

S47：彼らは否定すると思います。

T53：そうですね。否定しかねないわね。だからこれについては二通りあるわ。いいわね？信頼している者に対して誓いを立てる。じゃあ傍聴者について考えましょう。いいですか？

えー、日付に印を付けた人はいないみたいね。

S48：付けました。

T54：いいですね。日付についてはどうですか？

S49：一週間後のことです。

T55：一週間。悪くないわね。でも、最初に何かを始めた人に印を付けなきゃ。それとこれはどういう文書？

S50：これは…。

T56：彼らは34人。いいですか？いいですね。じゃあそれを書いたわね？いいでしょう。でもまだ終わってないと思うわ。もっと情報源を見てください。裏付け探しですよ、裏付け探し。

ここでグループ毎の話し合いを終え、裏付けについて全体で確認していく。

T57：じゃあ誰かこれの裏付け探しをしてもらえますか？さあ、どうぞ。

S51：えーどうしよう。今印をつけようと思っていたところだけど、無理です。

T58：こっちへ来て裏付け探しをして。いいから。アーメンが裏付け探しをします。みんな話を聞いて。自分の見つけた裏付けと一致しているか確かめて下さい。

S52：えーと、僕はただ、その…ああ、ここだ。だいたい5時ごろ…。

T59：えーと、まだ文書の中身に入るのは止めましょう。まず裏付け探しをします。戻って。いいわよ。じゃあもう一度やりましょう。

S53：えっ、僕に…、わかりました。

T60：まず裏付け探しをしてほしいの。それから文書を検討します。

S54：わかりました。大丈夫です。えーと、34人の男たちが誓ったと書いてあって、それは4月25日のことでした。その日は一週間後、実際の…。

T61：ペンを持って印をつけてちょうだい？そう。じゃあそれは一週間後。そして、この34人の民兵が誓ったことがどうして重要なのかな？

S55：あの、つまり…、34人の兵士はみんな仲間なので、リーダーが説き伏せていたかもしれません。

T62：わかったわ。じゃあ、1人が34人を代表していることになっているのね。

S56：そうです。

T63：これは単なる彼の話かもしれないし、彼は責任者かもしれません。そこはわからないわ。でも、どうということでしょう…。宣誓するというのは？みんな聖書や命や何かにかけて誓いますよね？だから私が言いたいのは、この文書に対する信頼です。これを信用しますか？宣誓しているので信頼できるかもしれない。34人が一緒になって話に同意しているので信用できないかもしれない。ここに34人がいるとします。何かについて意見を一致させられますか？例えば、この前の金曜日に何があったか、1分ごとに起きたことを厳密に合意できますか？

S57：できません（複数発言）。

T64：できるわけありません。そうでしょう？

S58：待って。これはあの3人の判事が…。

T65：彼らは治安判事、だから判事ですわね。

S59：わかりました。

T66：ですから、ここでメモを取るのには、この文書を信用するかしないかについてです。いいですね。

S60：わかりました。

T67：じゃあ、えー…。わかったことは、これがこの宣誓書を必要とした理由だということです。彼らが宣誓したのは、これをヨーロッパにいたベンジャミン・フランクリンに送ろうとしていたからです。そして彼はこれを使って、そうイギリスに落ち度があった、戦争になったのはイギリスのせいだということを証明しようとした。ですから、これでまたこの文書をどう理解するか変わるかもしれません。

S61：それは反対側にとっても同じことです。

T68：そうね、これに印をつけなきゃ。じゃあ、これを信用するかどうか考えましょう。えー、だからこの問題を改めて考えてどう思いますか？彼らは誰が戦争を始めたと言うと思いますか…。戦いを？

S62：（聴き取れず）

T69：彼らはイギリス軍が始めたと言っています。じゃあ、精読に移りましょう。彼は精読したくてうずうずしているようだから…。

S63：たいしたことじゃないんですけど。

T70：いいわよ。

S64：あの僕たちはただ…。僕たちは文書を比較しましたが、一つには5時頃に起きたと書いてあります。それからもう一つの文書には2時頃と書いてあります。

T71：あら！で、誰が正しいの？

S65：（一斉に話す）

T72：別の文書には、我々は始めたと書いてあって、それを2時としています。じゃあ5時には何が起きたの？

S66：我々は到着した（複数発言）。

T73：彼らは到着した、ですね？でもこれは、彼らは5時、我々は広場に向かって進んだと言っていて、そっちは、彼らは2時に前進したと言っています。ですから食い違いっていますね。すごいわ。今彼が使ったのが実証（corroboration）というテクニックで、今週後半に取り組むつもりですが、二つの文書を比較します。よくできました。いいですね。じゃあ、今からやって欲しいのは、この文書を同じようにうまく精読することです。くまなく念入りに読んで、文書にマーカーを塗ってください。

ここでは資料Bの裏付けをしながら、一部精読作業に着手させる。その結果、次時以降に本格的に取り組ませようとする「実証」方略に気付く生徒も現れている。次に、再びグループ毎の精読である。

T74：そこには、どんな風だったのかいろいろ書いてあるわ。精読するということは、それがどのように書かれかを読むということを頭に置いて下さい。たいしたことじゃなかったとしても、一度無視してしまった内容の一つでも、何かを感じさせるものはずです。

はい、その通りよ。時間には食い違いがあります。あら日付を調べてるのね。いいですね。あの、日付についても話し合ってください。一週間後だったわね？なぜ戻ってきたのかしら？そうね。じゃあ、この文書をどう思いますか？この話は何を伝えようとしていると思う？どんな風を感じる事ができる？イギリス軍に落ち度があった。…彼らは実際に背中から彼らを撃った。そう、本当よ、でしょう？

そう、それは大事ね。そのとおり。もし誰かが…。もし背中を向けて立ち去ったときに誰かがあなたを撃ったとしたら、それをどう思う？卑怯だよな？でしょう？つまり、彼らがみんなそこを立ち去ろうとしていたら、突然背後から彼らを撃ったということのようです。ずいぶん卑怯ですね。じゃあ、それをどう思うか考えて下さい。いいですね。ずっと、ずっと良くなりました。

S67：だから彼らはとてもイギリス人を責めています。

T75：彼らはイギリス軍を責めています。で、イギリス軍は何をしましたか？

S68：彼らを責めています。

T76：大きな戦争の話だとしたらあなたたちは…、あなたたちは相手側を責めますか？

S69：はい。でも僕が言ってるのは、彼らは…。

T77：その通りです、そう。…

最後の方はあまり聴き取れていないが、グループ毎の精読作業はここで一旦切り上げられる。

T78：いいですか。さあこれをもう少し解釈しますから、何人かに重要なところにマーカーを塗ってもらいます。「我々、ナサニエル・マリケン、フィリップ・ラッセル、およびその他32名の男は現在広場にいる。全員法によって認められた年齢に達したレキシントンの住人であり、4月19日朝5時頃、広場に向かって進軍したことを証言および宣言する」。さて彼はここでいくつかの単語を使っていますね？彼は証言及び宣言をしています。じゃあ精読について考えながら、なぜ彼はこの単語を選んだのでしょうか？なぜ彼は証言および宣言と言うのでしょうか？ゴードン？

S70：それが事実だからです。

T79：彼はそれが事実であり公式なものだと言っている。そうですね？つまり彼はこれが事実だと言っています。彼らは声明を出し、これらの正当性を述べています。「我々は広場に向かって進軍し、我々に向かって進んでくる大きな部隊に会いました」。さて、面白いことに彼らは約34人の男たちであり、他に誰かがいるとはまるで言っていない。イギリス軍の兵士は何と言いましたか？

S71：200人～300人です。

T80：200人～300人の人々。じゃあ、本当はそこに何人いたかわかりますか？

S72：わかりません。

T81：そこには他の入植者もいたかもしれないし、女性がいたかもしれない。わかりません。でも、ここで数に関して何らかの食い違いがあることはわかります。「我々の一部は広場に來る途中で、残りの者は到着していた。そんなとき彼らはばらばらになり始めた」。ばらばらとはどういう意味でしょうか？

S73：広がること（複数発言）。

T82：広がること。そうですね？ですからこの言葉は広がったという意味です。誰か先を読んで、この文書をどう思うかや、何が大切かについて、次の部分から重要な事実を挙げて下さい。誰かやりたい人は？ありがとうございます、アイビー。じゃあ、アイビーと一緒に次を読んで下さい。これは何か？何が大切か？マーカーを忘れてるわ。それでいいわ。

どうぞ。まずそこを読んでくれる？

S74：私たちがイギリスの部隊に背中を向けると同時に、彼らは私たちに発砲した。だから、それは公平な戦いではなかったみたいに感じさせます。なぜならもし後ろを向いて…。

T83：そう。メモを取って。いいでしょう。じゃあ…、それはフェアな戦いではない。なぜでしょう？

S75：彼らは準備していた。

T84：彼らは準備していた。ダニエルが彼らは卑怯だと言いました。つまり彼らが逃げようとして背中を向けて、それから彼らが撃ちました。それで彼らは発砲、つまり撃ち返せましたか？おそらく無理でしょう。だからあまり公平とは思えません。いいですね。

さて、ここにもう一行あって、私たちの歴史的疑問に答えてくれます。誰かそれにマーカーを塗ってくれませんか？誰が先に発砲したか？誰が戦争を始めたかを教えてくれる部分はどこでしょう？ありがとう、ハンナ。次の部分にマーカーを塗って下さい。枠が全部埋まるようにしてね。

S76：我が隊の誰も銃を撃たなかった。…そして彼らが発砲する前、また…。だから要するに、彼らは全く銃を発砲しなかったと言っていて、でも彼らが発砲を始めた後もそれは言っていない。

T85：いいわ。私たちの歴史的疑問に答えを出す前に、彼らは誰が撃ったと言っているか？イギリス軍ですわ。

さて、ここに一つの言葉があります。このことについて考えるとき、それが浮かび上がってきます。なぜ人は話す言葉を選ぶのかについて考えるときです。私が何の話をしているかわかりますか？

S77：（一斉に話す）

T86：誰か発言したわね。ヴァレリー？

S78：自分たちの知る限りでは。

T87：自分たちの知る限りでは。彼がそう言ったことがなぜ重要なんでしょうか？

S79：すべて知っているというわけじゃないからです。

T88：彼らは確信がない。彼らは自分たちの知る限りで我々34人と言っていますが、それはありえますか？

S80：はい（複数発言）。

T89：可能性はあるでしょうね。つまり彼は知らないと言っています。ですからこれに疑問を持たなければなりません。そうですね？私たちは何が起きたかわかりますか？というのは、彼は自分たちの知る限りでと言っています。もしかしたらそうだったのかもしれませんが、彼らはわかりません。もしかしたら彼らは自分たちをかばおうとしているのかもしれませんが。そうでしょう？もしかしたら

彼らはイギリス軍が始めたことにしたいので嘘をついているのかもしれませんが。そうすれば戦争を正当化できます。私たちにはわかりません。それにこの最後の部分で、「我々は全員逃げた」とあります。何が起きたかわかりますか？

S81：彼らは逃げました。

T90：入植者たちは逃げた。これはもう一方の話と一致していますか？

S82：はい（複数発言）。

T91：一致する。そうですね。2～3分時間を取って下の質問に答えてください。

その後でこの頃の大変有名な画像を見せましょう。

ここでは、精読の五つの方略（①著者はどんな主張をしているか？②著者はどんな根拠に基づいてその主張を裏づけているか？③この文書はどんなことを感じさせるか？④著者は自分を正当化するために言葉や表現を使っているか？⑤著者が除外したのはどんな情報か？）を互いに関連づけながら、生徒の発言を評価したり、新たな資料解釈に気付かせている。

紙幅の都合で、教師と生徒のやりとりの紹介はこれで留めざるを得ないが⁷⁾、この後ドゥーリトルにより1775年に制作されたエッチングと、1859年にブラショーにより描かれ革命150周年記念切手にも採用された絵画とを比較して、どちらに真実味があるのかを追究させている。ここでもRLHの精読の方略が要求されるが、二つの絵画を直接比較するところから、自然に「実証」(corroboration)の方略も用いられている。

因みに、授業の最後の課題は、二つの絵画の内どちらが信頼できるか議論させ、ワークシートにまとめさせるものである。そのグループ毎の話し合いの中で、教師が述べた発言を参考までに紹介しよう。

T149：えー、わかっている唯一のことは、実は…、彼らは逃げたということで、これらの絵は両方、そう、元の絵は彼らが逃げるのを描いているからその絵を残しておかなければなりませんね。おそらくそっちの方が正確です。本当はどうだったのかわかっているのかって？ もちろんわかりません。さらに多くの史料が必要です。

4 おわりに（小括）

ジーグラの授業のねらいは、アメリカ革命の発端をなし、普通の米国人が歴史的事実ととらえているレキシントンの戦いについて、本当のところはどうだったのかを、史料の丹念な読み解き（精読）により考えさせ、歴史の構築性・神話性に気づかせようとするところにあった。したがって、二つの絵画を精読させたのも、どちら

が真実か結論を下すことが目的ではない。過去の真相に迫るには、立場の異なる史料を篩にかける歴史家の方略(RLH)が重要なこと、また歴史の神話化は決して遠い昔のことではなく、我々の絵画を見る眼差しの中にも潜んでいることを認識させようとするところにあった。これらの点で、本実践は見事な構成と展開を示していたと評価できる。

では、RLHの教授方略の一つである精読についてはどう評価すべきであろうか。本事例研究で明らかになったのは以下の5点である。第一に、RLHの熱心な実践者には、①出所の裏付け(sourcing)、②文脈への位置付け(contextualizing)、③実証(corroborating)、④精読(close reading)は明らかに区別してとらえられていることである。第二に、精読に先立って、出所の裏付けと文脈への位置付けが重視されていることである。第三に、精読の後に実証を位置付けようとしているが、実際には精読の過程に実証は入り込むことである。第四に、精読の方略として5点が挙げられるが、やはり歴史固有の解釈的・構築的性格を反映して、出所の裏付け、歴史的な文脈への位置付け、実証という方略と関連付けざるを得ないことである。第五に、RLHに基づく授業には教師の教授方略への熟達と指導力、そして精神的な強さが欠かせないことである。例えば、何度指導しても生徒は文書の裏付けより内容の読解に走りがちであるし、中には「つまらないIt is boring」(S46、二重下線部)と平気で発言した生徒が見られたように、集中力を持続させるのは容易ではない。市民性のためのツールとして、普通の高校生・中学生を対象とする以上、主題の設定や教材の選択、グループ構成と時間配分などは、今後さらに検討すべき課題であろう。

本研究は、一つの授業分析を通じた事例研究に過ぎない。それゆえ、これをもってRLHの是非を論断することはできない。だが、筆者の手元にはRLHに共鳴する別の教師の授業データもあることから、さらに事例研究を継続して行い、そこから日本の歴史教育改革への示唆を得ることを今後の課題としたい。

【注】

- 1) ワインバーグらは、そうした歴史の授業や評価を「泡(バブル)のようなもの」とし、Beyond the Bubbleと称するウェブサイトも起ち上げ、Reading Like A Historianの授業に対応する歴史評価問題の開発などにも取り組んでいる。<https://beyondthebubble.stanford.edu/>
- 2) フォックス・ニュースは保守系、MSNBCはリベラル系の、米国のニュース専門局である。
- 3) S. Wineburg, D. Martin, & C. Monte-Sano, *Reading Like A Historian :Teaching Literacy in Middle and High*

School History Classrooms, Teachers College Press,
2011, v-vi.

4) <http://sheg.stanford.edu/r/h>

5) 中村洋樹「歴史実践 (Doing History) としての歴史学習の論理と意義－『歴史家の様に読む』アプローチを手がかりとして－」, 『社会科研究』(全国社会科教育学会) 79号, 2013年, 49-60

6) 前掲書 3)

7) 本実践の全容(教師と生徒の発言と絵画史料等)は以下のウェブサイトに掲載している。参照されたい。

http://www.nier.go.jp/history_lessons/

【付記】

本研究は科学研究費補助金基盤研究(B)(海外学術調査)「米英独における評価の高い歴史授業の収集・分析とそのデータベース化」(課題番号24402049)(研究代表者:二井正浩)による研究成果の一部である。